

高校教育におけるボランティア活動の可能性

岡 部 泰 子

◇ 高校生とボランティア

一九九二年、「国際（現ユニバーサル）科」開設に伴い「国際ボランティア活動」を展開したことが端緒となって、校内で様々なボランティア活動が行われるようになった。

これまでの活動を振り返り、高校教育におけるボランティア活動の意義を考えてみたい。

◇ 生徒会におけるボランティア活動

本校では生徒会が中心となり、世界に目を向けユニセフやユネスコなどと連携した「国際ボランティア活動」を行なっている。ここではその活動の主なものを紹介していく。

△ カレンダー募金活動▽

各家庭から不要カレンダーを提供してもらい、毎年一月に札幌市民生協店頭で販売、売り上げを日本ユニセフ協会に寄付する活動。一九九四年以

来二二年間、一度も欠かすことなく続いている。困難な状況にある様々な国の子どもが存在を知り支援することで、世界を身近に感じられる生徒も増えた。

生徒会執行部は校内でカレンダー提供を呼びかけるだけでなく、企業への依頼文書送付、カレンダー回収の作業をし、公文書作成技術や相手との対応の仕方など、さまざまな事柄を学ぶ。楽しみにしてくれている市民も多く、開店前には長蛇の列ができる。毎年来てくれる方、貯めた硬貨を寄付してくれる方、励ましの言葉をかけてくれる方など、多くの方々に応援されている。生徒会執行部は実際に店頭販売を担当し、臨機応変な対応を要求される。最初は声も出せなかった生徒が、終了間際には大きな声でお客さんにお礼を言い、とてもいい表情で対応する。市民の善意が生徒の心を開き、短時間の間に大きく成長させてくれる、大変得がたい機会である。

△ 海外への物資支援活動▽

ユニセフやユネスコとのつながりから、物資を

海外に届けるボランティアが展開されるようになったのは一九九六年。これまで、「ロシア・ノボシビルスク市（札幌の姉妹都市）への日本語書籍の寄贈」、「中国の日本語学習者への日本語辞書送付」などを行った。

海外に広く目を向けることで、自分たちに何ができるか、世界の国や地域が現在どのような状況にあるかを知るきっかけとなる。現地からのお礼の手紙が届いたり、現地の様子を収めた写真などを見ることで、「世界とつながっている」実感を得ることができ活動である。

△ 被災地支援▽

二〇一一年、東日本大震災で被害を受けた図書館に本を送る活動をしているNGOの存在を新聞で知り、取り組みが始まった。赤十字部と連携して活動を行うため、顧問同士の調整や作業の住み分けなどの話し合いを事前に重ねた。生徒会執行部にとっては、街頭募金などで一般の方と触れ合うことの多い赤十字部員の存在は、参考になる部分が多かったようである。

近隣住民にも提供を呼びかけ、新聞折込も入れて活動を展開した結果三〇箱の古本が集まった。届けてくれた方との交流や、ジャンルごとに別する作業を通して、非常に多くの善意に囲まれていることを知る活動となった。これをきっかけに、水害や地震などの被災地支援もフットワーク軽くなるようになった。

◇ 地域に向けて広がりを見せるボランティア活動

広い広報能力をベースとした継続的な国際ボランティア活動の展開は、学校全体にボランティア意識の醸成をもたらした。そうして始まった各種のボランティア活動は、日頃お世話になっている方たちに恩返しができるようなものや、世代を超えて交流を深められるものなど、生徒にとっても学校にとっても、地域との距離が縮まる恰好の機会となっている。

△ 鴨々川清掃ボランティア

本校生徒会の美化委員会が中心となって全校生徒に参加を呼びかけ、地域のNGOが年一回行っている活動「鴨々川清掃」に参加している。学校近辺を流れる鴨々川について知り、自然環境保護の大切さにも気付くことができる。自分の手で清掃することで川がきれいになる喜びとボランティア参加証明書の存在が、生徒のやる気につながっている。

△ 「ゆきあかり」N中島公園

札幌市が雪祭り時期に展開している「ゆきあかり」N中島公園は、アイスクャンドル作成体験や雪合戦など、観光客に楽しんでもらうイベントである。毎年生徒会執行部や複数のクラブ員が参

加し、アイスクャンドル作成・補修作業や観光客との雪遊び補助を行っている。観光客と触れ合うことで、郷土愛や「地域おこし」の必要性に気づく生徒が多い。

△ 読み聞かせボランティア

本校近隣の北海道立文学館で毎月一回開催されている読み聞かせイベント「わくわくこどもランド」でのお手伝いを依頼されて今年で九年になる。全校生徒に参加を呼びかけ、毎年二〇名以上のボランティア参加がある。会場でのアシストが主な作業内容だが、年二回、本校生徒だけで「わくわくこどもランド」を展開する。絵本や紙芝居のほか、エプロンや音楽、指人形などを使ったパフォーマンス、大道芸を使った劇など、内容も年々多彩になってきた。参加生徒はグループに分かれ、もづくりや読み聞かせを担当して個性を発揮している。

評判を聞いた保育園での通年ボランティアや、道立近代美術館展示室での読み聞かせ、市主催の福祉イベントへの参加など、「札幌静修高校読み聞かせボランティア」として出演する機会も増えた。回を重ねるごとに生徒の顔が生き生きとして、身振りや声も大きくなり、子どもへの対応力も上がっていく。保育士や福祉分野への進学・就職を希望する生徒も数多く、実践経験を積むのに大変良い機会となっている。

◇ まとめとして

ボランティアというと敷居が高く、「面倒だ」と感じてしまう高校生が多いと思う。しかし、ごく身近な事柄を取り上げ、「自分にもできる」という感触と「面白そう」という興味・関心を持たせることができれば、後は生徒たちが、その柔軟な心で、私たち大人が期待する以上のことを学んでくれる。

若者のコミュニケーション力不足が指摘されて久しいが、高校時代こそ、社会に向けて飛び立つ準備期間としてその力を醸成する必要がある。また伸張の可能性も非常に高い時期である。ボランティアという「充足感や、秘められた自分の可能性を確実に育ててくれるもの」に取り組むことで、生徒たちが成長していく様子は何にも代えがたい。ボランティア活動は、社会への眼を開かせてくれる素晴らしい教育機会である。一方通行ではない、多角的な「教育」の必要性が見直されている現在、私たち教員がボランティア活動に興味・関心を持ち、取り組みの方法を模索することが必要なのではないかと思う。

岡部 泰子（おかべ やすこ）

札幌静修高等学校 国語科 教諭。生徒会執行部や放送局の顧問を長く担当している。